



The late Dr. Fumio MAEKAWA (1908-1984)

□前川文夫博士 Dr. Fumio MAEKAWA 1908-1984

本誌編集員東京大学名誉教授前川文夫博士は去る 1 月 13 日に逝去されました。

前川博士は明治 41 年 10 月 26 日に生まれ、昭和 7 年 3 月 31 日東京大学理学部植物学科を卒業されてから、昭和 8 年 4 月理学部副手、同 9 年 4 月より助手、同 14 年 6 月理学部講師、同 18 年 6 月助教授を経て、同 31 年 4 月東京大学教授に任ぜられ、同 44 年 3 月停年退官されて 5 月東京大学名誉教授の称号を授与されました。この間、昭和 14 年 9 月から同 18 年 2 月まで陸軍に応召されて中支に派遣され、また昭和 15 年 12 月ギボウシ属の研究により理学博士の学位をうけられ、昭和 31 年 4 月から 3 年間は理学部附属植物園長を務められました。1960、1965、1968 年の 3 回にわたり南米アンデス山系の植物調査を行って興味ある研究資料を集められました。

博士の研究はギボウシ属とカンアオイ属の分類にはじまり、分類、分布、進化について多くの新知見を加えてそれらの研究の基礎を築かれたことはよく知られています。ま

たランやスマレについても特に深い関心をもち、昭和46年「原色日本のラン」をまとめて出版されました。博士の研究は更に植物の形態、発生、系統についての諸問題に発展し、托葉起源論、葉類説、古赤道分布論など独創的な仮説を発表されたことも周知の通りであります。一方、著名な漢学者であった御父上の跡をうけて和漢の古典にくわしく植物和名の語源についても色々新しい見解をだされました。

本誌とのかかわりは深く、第9巻(1933)に日本産カンアオイ類の研究が連載されて以来、数多くの研究を本誌上で発表されてきました。また27巻(1952)以降今日に至るまで編集員として本誌の発展に貢献してこられました。博士の読書欲は最近になっても益々盛んで、昨年11月号まで多くの書評を書かれたことも読者の記憶にまだ新たなことと思います。

博士を失ったことは本誌だけでなく日本の学界のため誠に大きな損失であり、ここに博士の多年にわたる御貢献を偲びつつ深く哀悼の意を表わすと共に、博士の御冥福を心から御祈りする次第であります。

(原 寛 Hiroshi HARA)

□前川文夫博士の思い出 In memory of Dr. Fumio MAEKAWA

君はあと2年足らずで喜寿を迎えるという年で逝って仕舞った。

先日、君の知己で高円寺に住む医者と、告別式の席上で藤田博士(一高時代の私の同級生、天文学者、学士院会員)より文夫君の府立4中や名古屋の高等学校時代の話を聞くことが出来た。植物採集に熱心で、また大賀教授より個人的にも植物学の話聞いていたようである。

ここに多くの人々に人望のあった君の思い出を綴って見たいと思う。1975年、国際植物学会議がレニングラードで開かれた際私は君と一緒に参加したが、是が只一回の一緒の外国旅行であった。家族に見送られて横浜港でバイカル丸に乗船、翌日ナホトカ上陸、汽車でハバロフスク着、ここで林業試験場を見学し、ミチューリンのリンゴを見た。レニングラードでは会議の合間にサーカスを見た。宿の前には日露戦争で只一隻帰ることの出来た戦艦が係留されて居り、時々その長い煙突からポッポッと煙が出るのを君は興味深くながめていた。会議後のエキスカッションはアルメニヤ行にした。主都エレバンの宿、岩窟のキリスト教の遺跡、サマルカンドの市場巡りと羊肉のジャンブーク、タシケントの果物や漢薬の市場など思い出の深いものであった。イルクーツクでは君の妹君の夫君、窪田章二郎君の弟君が眠っている日本人墓地を尋ねた。バイカル湖畔の博物館、横浜港上陸の際の出迎えの人々など、君と一緒にしたこの旅は私にとっては末永く思い出になることと思う。

昭和7年に植物学科卒業後、助手となり中井教授の次の室で研究に従事した。当時教授が竹笹類の研究をして居られたので、これに興味を抱き、多くの種類を採集し、また葉の肩の毛を興味深くスケッチして居た。学位論文はギボウシ属のモノグラフで、原稿